

広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
 (第44号 2016.3)

時空を超えてよみがえるキモノ文化の再発見と継承を ねらいとした被服学習の開発

日浦 美智代
 高田 宏

一ノ瀬 孝恵 柴 静子 高橋 美与子
 三根 和浪

はじめに

平成26年度は、「欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」というテーマで、日本衣装の伝統とものづくりの精神への理解を基軸とした学習を附属福山高等学校の「家庭基礎」において開発した。明治期の輸出用キモノの観察では、ただ見たり触ったりするだけではなく使用されている絹地の厚み測定を実施し、西欧では薄物の絹が好まれたことを明らかにした。授業前・後に実施した調査から、「着物には布を無駄にしないという考え方がある」、「着物は欧米に日本的な美の様式を伝えた」、「刺繍付絹の着物の輸出が日本の近代化に貢献した」、「民族衣装としてのキモノを誇らしく思う」と感じた生徒が有意に増えたことが示された。調査を通して、伝統衣装である着物について、歴史的にまたグローバルに理解させる学習として適切であり、さらには保育園訪問のための布のおもちゃづくりにまで効果が波及したことが明らかになった¹⁾。

しかし研究課題として、①明治期に西欧に渡り、日本文化への熱烈な興味と理解をもたらすことになった輸出用キモノについては、これまで取り上げてきた横浜の絹物商椎野正兵衛から転じて、京都の飯田高島屋の活動や実物衣装を対象として、キモノの力をより多角的に探究させる。②セントルイス万国博覧会(1904)がキモノ・ブームを巻き起こしたこと、及びその後にキモノがアメリカに普及していった理由について考えさせる。③キモノ文化のちからを再発見し、過去、現在、未来へとどのように継承して

行くかについて、既修の学習内容を踏まえて考えさせ、イメージ表現活動をさせるという3点が残された。

本研究では、以上の課題の解決を図るための授業開発を行い、普及可能な被服学習モデルとして提案することを目的とした。

1. キモノ文化の再発見と継承をねらいとした被服学習の開発と授業実践

(1) 授業構築の視点

授業実践は、広島大学附属高等学校1年3組(男子22名、女子20名の計42名)において、2015年11月6日から11月28日のうち6時間および課外の時間を充てて実施した。授業者は一ノ瀬孝恵教諭であった。

日本の伝統衣装といわれる着物であるが、戦後70年の急速な社会変化に伴って、価値観や利用実態が大きく変化してきている。近年では、伝統行事の際の晴着や趣味的な衣装として用いられるのみであり、ほとんどの日本人が着物とは縁遠い生活をしている。経済産業省の商業統計などによると、1982年に2兆円あった着物業界の売上高が2012年に4400億円にまで落ち込んでいる。また、内閣府などの調査によると、1967年には20代以上の女性の約3割が6～10枚のキモノを持っており、全くもたない者は2.7%に過ぎなかったが、2008年には20～40代の女性のキモノの着用経験者においても約36%が保有数ゼロと答えている。生産の基盤も弱っており、西陣織に携わる人はわずか3100人ほどである²⁾。

Michiyo Hiura, Takae Ichinose, Shizuko Shiba, Miyoko Takahashi, Hiroshi Takata, Kazunami Mine :
 Development of the Clothing Education Program for the Purpose of the Rediscovery and Succession of the
 Culture of the Kimono

このように着物離れが加速し、市場が縮む現在、伝統衣装としてのキモノについて、被服材料、被服構成、着装などを取り上げて、より多角的に探求させ、キモノ文化の力を再発見させ、その未来について考えさせることは家庭科の内容として重要であると考えます。

そこで、「キモノに明日はあるか」をテーマに、新聞記事から着物の現状をまとめ問題点を考えさせた上で、明治期に欧米に輸出されたキモノの実物衣装や図録を対象に、海外にキモノが普及したのはなぜかを理解させながら、2020年東京オリンピック・パラリンピックで紹介したいキモノのプロジェクトを行う授業を構想し、実践を通して効果を検証した。それにより、生徒たちが、多様な価値観が歴史的にキモノの発展を支えてきたことに気づき、この衣装を身近なものとして捉え、そして創意工夫して未来へ繋いでいくことを意図した。

(2) 授業の目標と指導計画

授業の目標と指導計画は次の通りであった。

(i) 授業の目標

- ① キモノを通して衣生活文化に関心を持つとともに、被服材料や着装の特徴を理解する。
- ② 日本のキモノの現状を明らかにするとともに、日本のキモノが欧米の衣装に影響を与えたことを理解する。
- ③ 衣生活文化の継承を考え、2020年に向けキモノのプロジェクトを行うことで、未来につながるライフスタイルを考えることができる。

(ii) 指導計画

全6時間と課外学習の時間配分は次に示すとおりである。学習過程は表1に示した。

第1次	絹の布で袱紗をつくろう・・・1時間
第2次	キモノに明日はあるかⅠ ー着物の構成、着装、歴史ー・・・2時間
第3次	欧米のモードのジャポニズム ・・・1時間(+課外)
第4次	キモノに明日はあるかⅡ ーキモノプロジェクトー・・・2時間

(3) 指導過程

(i) 第1次の指導内容

簡単にできる絹地の袱紗の製作を通して、絹織物の特徴を体験的に理解させた。準備物及び

製作手順は次の通りであった。

[準備物]

- 布端の始末を行った36cm×36cmのリサイクルキモノの布(絹)を準備した。
- 台(形状安定用)12cm×21cm

[製作手順]

- ① 布を中表にして三角に折る。
- ② 待ち針で布をきちんと合わせ、縫う位置にしるしをつける(図1)。
- ③ しるし通り2か所を縫う。
- ④ 表に返して台を入れ、形を整える。

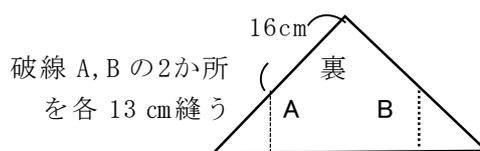


図1 ミシン縫いの位置

授業前に「袱紗を知っているか」と尋ねたところ、「知っている」と答えた生徒は7名で、袱紗の認知度は16.6%と極めて低かった。また、「配布した布はどのような繊維からできていると思うか」との問いに、「絹」と正解を答えた生徒は9名、「綿」と答えた生徒が3名、「ポリエステル、ナイロン」などの化学繊維だと答えた生徒が13名であった。正答率は21%と低かった。

(ii) 第2次の指導内容

被服材料の特徴、キモノの歴史と構成などを理解させ、伝統衣装としてのキモノの現状について知ることによって問題点を探らせた。

(ア) 被服材料

綿、毛、麻、絹の4種の布見本を使用し、繊維の種類を考えさせた後、前時に製作した袱紗の布が絹であることを確認させた。化学繊維についてもその特徴を理解させた。

(イ) キモノの歴史と構成

キモノが時代とともにどのように変化してきたのか、また、平面構成であることから縫い直しが容易であることを理解させるため、VTR「着物の文化を探るールーツ・変遷・構成ー」を視聴させた。続いて、リサイクルキモノ6枚を準備し、6班に分かれてキモノを実際に解体させ、どのような構成になっているのかを記録し確認させた。生徒は、キモノの解体を通して気づいたことを次のように述べている。

表1 学習過程

次	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価
1 (1)	袱紗づくり	<ul style="list-style-type: none"> ○ミシンを準備し、絹地の布(キモノを解体したもの)を使用して袱紗を縫うことで、絹地の特徴を体験的に理解する。 ○簡単袱紗を完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○キモノを解体した布の種類を知らせず、その特徴を確認させる。(知識・理解) ○袱紗を完成させることができる。(技能)
2 (2)	被服材料 キモノの歴史と構成 キモノに明日はあるかⅠ リメイクキモノ 椎野正兵衛	<ul style="list-style-type: none"> ○事前アンケートを行う。 ○前時に作った袱紗の歴史や使用されている材料を知り、布見本を使って被服材料の特徴を考える。 ○VTR「着物の文化を探る」を視聴し、キモノのルーツ・変遷・構成を理解し、キモノを解体して、特徴を考える。 ○新聞記事「着物に明日はあるか」を熟読し、キモノの現状についてまとめ、問題点を考える。 ○明治期にアメリカに輸出されたイヴニング・コート(全面に藤の刺繍)の更生品を観察し、特徴に気づくとともに、リメイク前の衣装がどのようなものであったかを知る。 ○動画「150年の時空を超えて蘇るジャパンプランドの先駆け S. SHOBEY」を視聴し、椎野正兵衛氏の衣装製作への思いを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○袱紗の歴史を知り、被服材料である繊維の種類と特徴を理解する。(知識・理解) ○キモノの歴史と特徴について映像を通して確認した後、キモノを解体することで、キモノの特徴に気づく。(関心・意欲・態度) ○キモノが生き残るためにはどのような条件が必要なのかを考えようとしている。(関心・意欲・態度) ○輸出されたイヴニング・コートが、年月を経てリメイクされた意味を考えている。(関心・意欲・態度) ○明治初期に活躍した人物を通して、日本人のものづくりの精神について考えようとしている。(知識・理解)
3 (1)	日本刺繍 モードのジャポニズム(フランス) モードのジャポニズム(アメリカ)	<ul style="list-style-type: none"> ○実物のキモノ風室内着を観察し、なぜフォルムを変化させ、刺繍を施して輸出したのかを考える。 ○VTR「美の壺・刺繍」を視聴し、刺繍の歴史的側面や心をこめて縫う意義を理解する。 ○VTR「ファッションデザインのジャポニズム」の視聴及び、図録「モードのジャポニズム」から、日本の近代化における輸出用キモノの関係について理解する。 ○図録「Kimono Beauty」やアメリカに残っている日本のキモノから、アメリカでのモードのジャポニズムについて理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○刺繍をほどこしたキモノに注目した理由を考えている。 ○刺繍の力について考えようとしている。(関心・意欲・態度) ○19世紀後半に欧米に起こったモードのジャポニズムの展開を理解する。(知識・理解) ○キモノは欧米のファッションにどのような影響を与えたのかを考えようとしている。(関心・意欲・態度)
4 (2)	キモノに明日はあるかⅡーキモノプロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ○キモノが生き残るためにはどのような条件が必要か考え、キモノを着て2020オリンピック・パラリンピックに行くためのプロジェクトを行う。(課題) ○キモノの構成、素材、着装、欧米のファッションに与えた影響を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○キモノプロジェクトのために必要な基本的な知識を身につけ、多様な価値観がキモノの発展を支えてきたことを理解している。(知識・理解)

	<p>○日本のキモノの現状を思い出し、キモノを着てオリンピック・パラリンピックへ出かけることを想定し、グループで各自が持ち寄ったキモノのアイデアを出し合い、検討し発表する。</p> <p>○キモノプロジェクトから再度自分の衣生活をふり返り、改善すべきことを考える。</p> <p>○事後アンケートを行う。</p>	<p>○日本のキモノの現状から、キモノが生き残るための条件を考え、自分の意見を述べようとしている。(思考・判断・表現)</p> <p>○未来につながるライフスタイルを考えることができる。</p>
--	--	---

使用教科書：家庭基礎(大修館)

参考資料：・The Asahi Shimbun GLOBE「着物に明日はあるか？」2015年3月1日朝日新聞日曜版

- ・図録「モードのジャポニスム」京都服飾文化研究財団
- ・図録「Kimono Beauty—シックでモダンな装いの美 江戸から明治—」東京美術

映像資料：・「着物の文化を探る—ルーツ・変遷・構成—」教育図書

- ・「ファッションデザインのジャポニスム①着物から現代へ」1994年5月23日 NHK 教育
- ・「美の壺 刺繍」2010年6月4日 NHK 教育
- ・「いま世界は—朝日新聞 GLOBE 連動企画」2015年3月1日 BS 朝日

動画：「150年の時を超えて蘇るジャパンプランドの先駆け S.SHOBETY」2015年6月10日 You Tube

- ・(着物は)大きな1枚の布ではなく、一定の幅の布から切られたものを組み合わせていた。無駄がないと思った。
- ・ずいぶん布が長く意外とパーツが少ない。えりらしきものがけっこう多い。本当に1枚の布からできているんだと感動した。
- ・まっすぐな布しかなかった。意外と簡単そうだった。

(ウ) キモノの現状

朝日新聞日曜版 GLOBE「着物に明日はあるか？」を1から6ページまで約30分かけて読ませた。新聞には、着物の仕立てがカンボジアで行われており、分業制で作られていること、着物が高価な理由、インクジェットプリント着物の存在、100年前の日本のキモノの型紙がドイツのドレスデン工芸博物館に保管されていること、2014年にイギリスのファストファッションメーカー「ニュールック」が、ゆったりしたローブのようなラインで価格が約2,000円から11,000円の上着、「Kimono」シリーズを販売し大ヒットしたこと、平安貴族の下着だった着物も、ゆったりとした着こなしから次第に着付けの作法が厳密になり複雑化したことなど、キモノの現状が多角的に書かれている。内容を読み取りまとめさせることで、問題点を探らせた。

(エ) イヴニング・コートの更生品

明治期にアメリカに輸出され、時を経てリメイクされたイヴニング・コートの実物を提示し、①いつの時代の衣装か、②製作した国はどこか、

③衣装の特徴は何か考えさせた。コートに施されている刺繍にも注目させた後、これがリメイクされたものであることを知らせ、美しいコートがリメイクされた意味を考えさせた。

(オ) 横濱の絹物商「椎野正兵衛」の精神

「150年の時を超えて蘇るジャパンプランドの先駆け S.SHOBETY」を視聴させ、150年も前に日本発のブランドを世界に飛び立たせた先駆者で和魂洋才の精神を持った、絹織物商「椎野正兵衛」のものづくりの精神について理解させた。

(iii) 第3次の指導内容

日本の明治期の輸出用キモノが欧米のファッションにどのような影響を与えたのかについて、理解をさせていった。

(ア) 日本刺繍

幕末から明治時代へと激動の京都にあって、キモノ風室内着を考案して輸出した西村總左衛門(千總)や飯田新七(高島屋)の活動について知らせ、飯田高島屋の実物のキモノ風室内着を刺繍とフォルムを中心に観察させた。続いて、刺繍について理解を深めさせるために、NHK番組「美の壺・刺繍」を視聴させ、刺繍の歴史的側面や「刺繍の神髄は立体感にあり」と言われる中で、ひらぬい、さしぬい、肉入れぬいなどさまざまな技法についての知識を深め、心を込めて縫うことのすばらしさを確認させた。

(イ) モードのジャポニスム

西欧におけるファッションのジャポニスムと日本の近代化における輸出用キモノの関係につ

いて理解させるために、VTR「ファッションデザイン ジャポニスム」の一部を視聴させた。キモノが江戸時代から海外へ渡ったこと、キモノ文様の豪華さとゆったりとした着心地の日本の部屋着はヤボンセロックンと呼ばれ男性用室内着として人気があったこと、1873年ウィーン万国博覧会で椎野正兵衛が明治政府の意向を受け西洋での絹製品の市場調査を行い、その調査をもとに日本製のガウンを製作し輸出したことなどを映像資料から知り、理解を深めることをねらいとした。また、図録「モードのジャポニスム」も合わせて使用した。

さらにアメリカではファッションのジャポニスムはあったのかを考えさせるために、現存しているキモノに注目させた。江戸時代中期から昭和時代初期までの優品(特にボストン美術館が誇る所蔵品の中から、日本文化を愛したアメリカ人医師ビゲローが収集した小袖と小袖雛形本)が紹介されている図録「Kimono Beauty」を使用した。また、20世紀初頭にニューヨーク5番街に店舗を構えた東洋品専門店である A. A. Vantine & Co を取り上げて、飯田高島屋製の刺繍付キモノ風室内着を販売して、アメリカのジャポニスムの形成と浸透に貢献したことを理解させた。関連して、1904年に開催されたセントルイス万国博覧会において、飯田高島屋のキモノ風室内着が爆発的に売れたことで、それ以降に大量の輸出用キモノが大量に欧米に渡ったこと、アメリカでは多様なデザインの Kimono が作られ現在まで続いていることも知らせた。

(iv) 第4次の指導内容

(ア) キモノプロジェクトその1

キモノが生き残るための条件を考えさせ、「キモノを着て2020オリンピック・パラリンピックに行こう」と題し、素材、形、模様(技法)、着装、価格など考慮し、未来に繋げるキモノのアイデアを各自で考えさせる予定であったが、第3次の授業が予定以上に長引き、時間不足となったため、一部課題とした。

(イ) キモノプロジェクトその2

まず、授業の開始前に、男子生徒2名、女子生徒1名にキモノを着付けて、授業開始直前にその姿で登場させ、授業をうけさせた。クラスメイトは、キモノ姿に驚きと興味を示し、真剣に授業に取り組んだ。キモノ・プロジェクトを行うために、第1次の授業で新聞からキモノの現状についてまとめたことを再確認し、これま

での学びの内容をパワーポイントにまとめるとともに、映像資料「いま世界は一朝日新聞 GLOBE 連動企画」を試聴することで、キモノの素材、構成、模様、および着装やキモノが欧米のファッションに与えた影響についてもふり返らせた。多様な価値観がキモノの発展を支えてきたことに気づかせた上で、キモノを普段から着用している本校卒業生(女性)にゲストティーチャーとして登場してもらい、キモノに対する思いや考えを話してもらった。一枚の布からできているキモノを大切に活用していき、木綿の浴衣などは、着物としての利用が難しくなっても最後には赤ちゃんのお尻にやさしい布おむつや雑巾にして利用できるという内容のお話により、生徒たちは強い関心を持つことができた。

学びの内容をもとに、課題で考えた未来に繋げるキモノのアイデアをグループで検討させ、発表させた。

生徒が考えたキモノのデザインの説明文の一例を挙げる。

○男女とも柄(矢絣、格子縞、唐草模様、鱗、麻の葉、葵、輪繁、青海波などの和柄や花柄、オリンピック用の国旗など)はプリントをし、色は選べる。

○女子はキモノに襟がいており裾が短く広がった形。あわせは内側のボタンで止め、リボンをつけ、袴のように前でしめても後ろで結んでもよい。

○男子は甚平にえりが付いた形。あわせが内側のボタンで止める。

○予算は10,000円以内で、靴や帽子と一緒に着用できる。

最後に、キモノ姿で授業を受けた生徒3名に感想を述べさせた。

「七五三以来ぐらいで着たのですが、思ったよりすぐ着られたので、普段でも着てみたいなと思いました。」「着物というと寒いイメージがあったんですけど、着てみたら案外ほかほかして暖かいです。」「男子とは違って帯とかちょっと時間がかかるんですけど、結び方になれたら、気軽にできそうな感じがしたので、お正月とかでも着てみたいです。」「簡単に着用することができ、着付け時間が短いこと、予想外に温かいことに感動していた。」

2. アンケート調査等による授業の評価

開発した学習プログラムの効果を測定するために、事前と事後にアンケート調査を実施した。

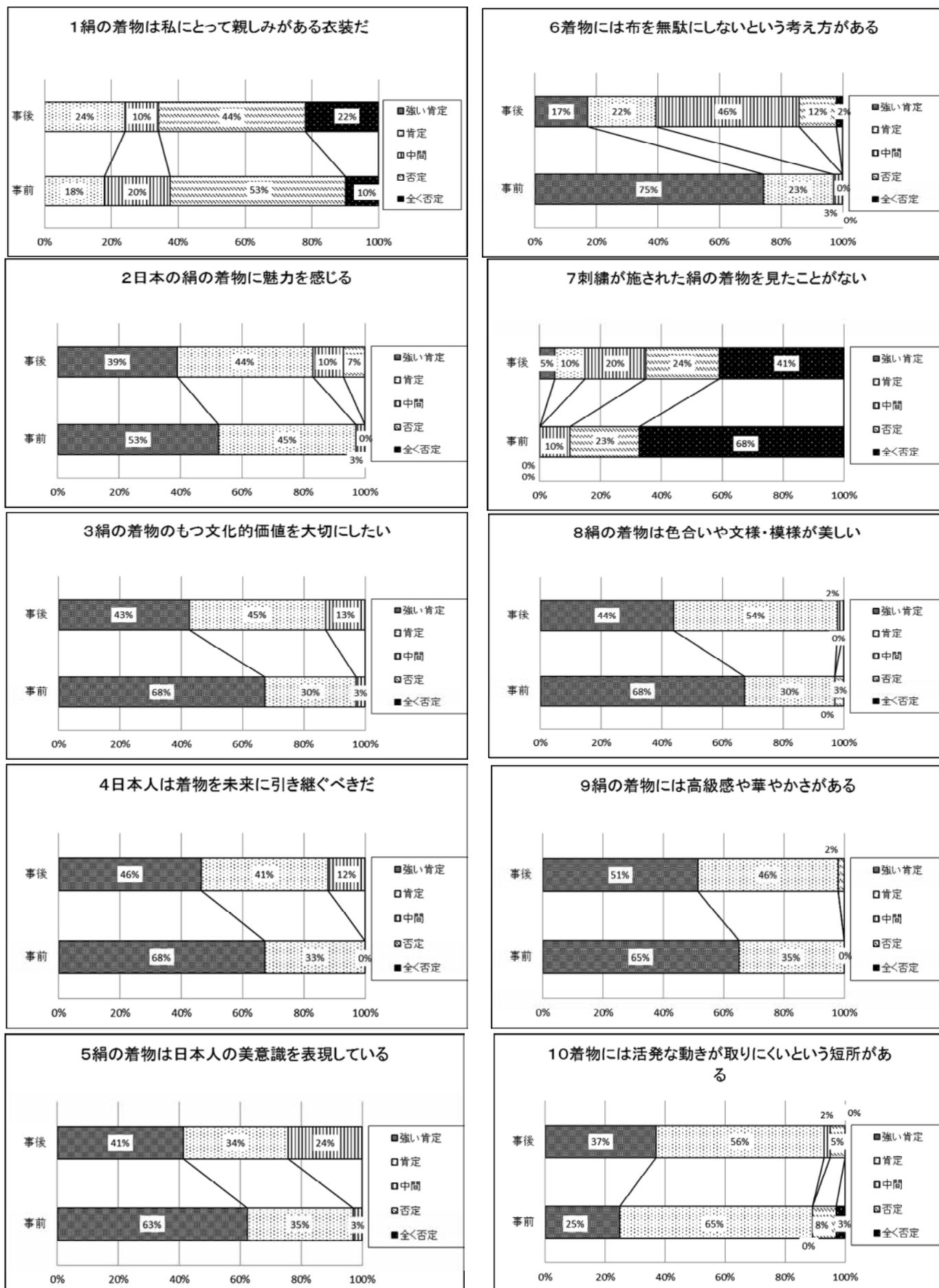


図 2-(1) 授業の事前と事後の意識の変化 (1)

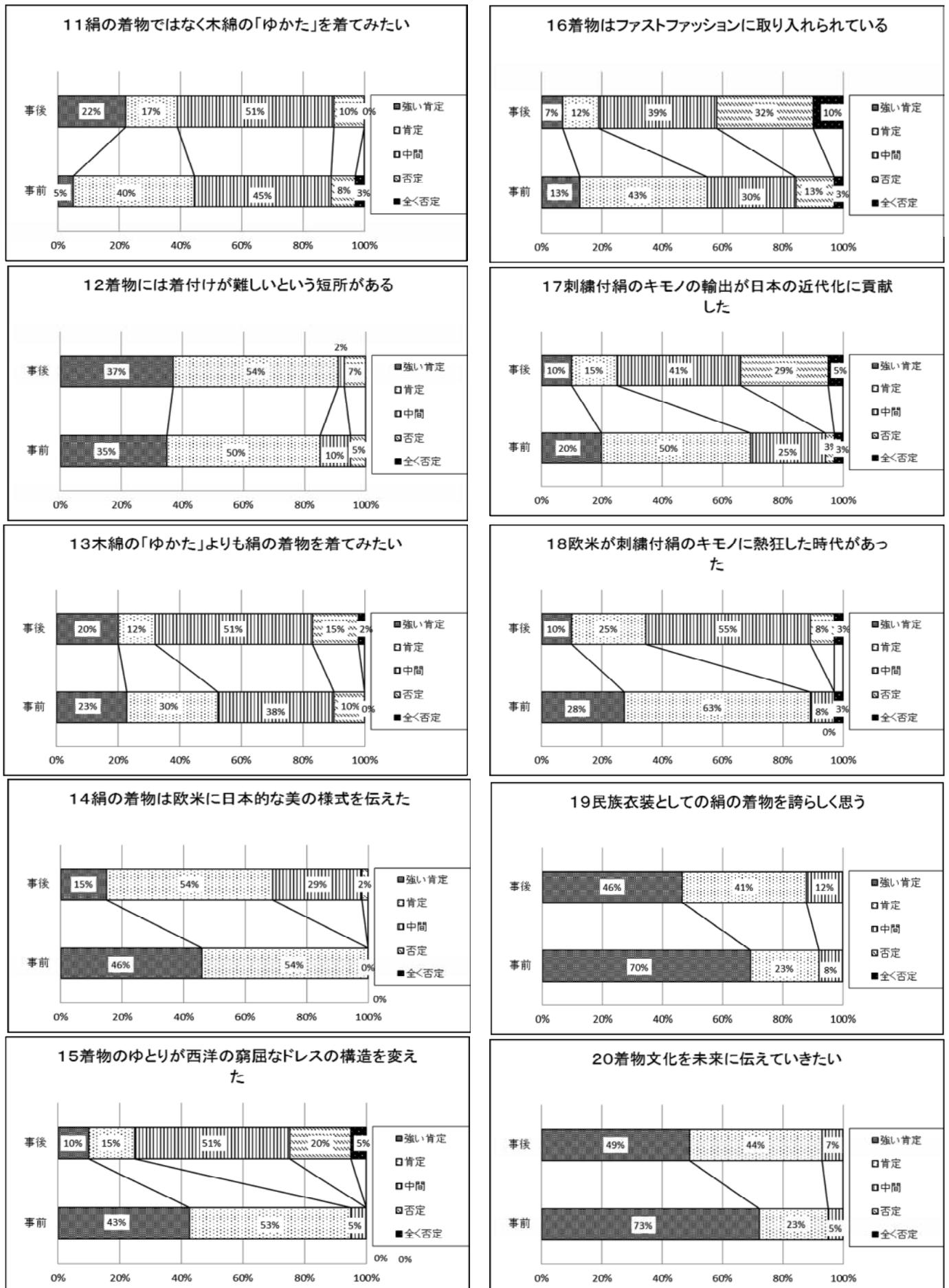


図2-(2) 授業の事前と事後の意識の変化 (2)

表2 学習内容に対する興味と理解

質問項目	とても そう 思う	そう 思う	どちら も言 えな い	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない
1 天然繊維の名前や材質について理解できたか	16 40%	17 43%	5 13%	2 5%	0 0%
2 絹がどうやって出来ているかということを理解できたか	14 35%	19 48%	7 18%	0 0%	0 0%
3 袱紗の使い方を理解できたか	22 55%	17 43%	1 3%	0 0%	0 0%
4 袱紗に込められた日本人の心を理解できたか	22 55%	14 35%	4 10%	0 0%	0 0%
5 VTR『着物の文化を探る』の視聴により、着物の歴史を理解することができたか	19 48%	17 43%	4 10%	0 0%	0 0%
6 実際に着物を解体することにより着物が平面構成であることを理解できたか	34 85%	4 10%	2 5%	0 0%	0 0%
7 椎野正兵衛のビデオ視聴から、明治時代のものづくり精神の素晴らしさについて理解できたか	14 35%	21 53%	5 13%	0 0%	0 0%
8 椎野正兵衛のビデオ視聴や学習から、明治時代の輸出用絹製品の欧米での魅力について理解したか	16 41%	20 51%	3 8%	0 0%	0 0%
9 20世紀初頭の欧米において、コルセット付きの窮屈な衣装がゆとりのある衣装に変化した際に、キモノの影響があったことが理解できたか	24 60%	15 38%	1 3%	0 0%	0 0%
10 明治時代に輸出されたキモノの実物の観察によって、日本の絹や刺繍の技の素晴らしさを理解できたか	25 63%	15 38%	0 0%	0 0%	0 0%
11 新聞「着物に明日はあるか」を読むことで、着物の現状や問題点について理解できたか	27 68%	13 33%	0 0%	0 0%	0 0%
12 NHK番組『美の壺・刺繍』の視聴により、日本刺繍の技法について理解することができたか	19 48%	21 53%	0 0%	0 0%	0 0%
13 自分たちで、想像力豊かにキモノのデザインを考えることで、キモノをより身近に感じることができたか	15 38%	17 43%	5 13%	3 8%	0 0%
14 日本のキモノ・絹織物・刺繍は後世に伝えていかなくてはいけないものだと思う	28 70%	12 30%	0 0%	0 0%	0 0%
15 日本のキモノ・絹織物・刺繍の継承のために私たちにもできることがある	12 30%	20 50%	6 15%	1 3%	1 3%
16 オリンピックに着ていきたいキモノのデザイン作りに、椎野正兵衛らのものづくりの精神を活かしたい	9 23%	24 60%	4 10%	2 5%	1 3%
17 オリンピックに着ていきたいキモノのデザインに日本の布の良さを活かしたい	19 48%	20 50%	1 3%	0 0%	0 0%
18 これからの生活のためにいろいろな縫い方を少しずつでも身につけていきたい	9 23%	19 48%	8 20%	3 8%	1 3%
19 キモノ文化を未来につなげることは持続可能な社会の実現について考えていくためのもとなる考え方にもつながると思う	13 33%	20 50%	5 13%	1 3%	1 3%

(注：回答者40名、上段は人数、下段は%を表している)

表3 「学習を終えて」の自由記述

1. 印象的だったこと

キモノが欧米に影響（欧米のファッションの転換・コルセットからの解放）を与えていて、ゆとりのあるかたちがファッションにとりいれられていたこと（11人）／キモノの色や日本刺繍の技術の素晴らしさ（様々な立体感ある刺繍。精密で写実感があり、すごい。）（10人）／着物を解体したこと・その構造は直線的・平面的で切るところが少ないこと（9人）／キモノの良さが再認識できたこと（8人）／明治期に日本のキモノが海外に輸出されていたこと（7人）／キモノは長期間使用できる・再利用できる（6人）／着物は海外でも多く仕立てられていること（6人）／日本では着物離れが進み、売り上げ高が徐々に減ってきていること（4人）／日本の型紙が外国の模様に取り入れられたり、日本の織物が外国のソファカバーとして人気だったり、着物が海外でファッションに盛んに取り入れられて、人気があること（3人）／着物にはいろいろな種類があること（振袖・小紋など）（2人）／着物を将来に伝えるために考えたこと（2人）／布の美しさ・繊細さ（2人）／今、キモノの未来に向けて努力している人々がいること（2人）／日本の技術が明治の時代から外国に認められていたこと（1人）／将来の着物のデザインを考案したこと（1人）

2. 椎野正兵衛ら明治の絹物商人の尊敬するところ

日本のキモノの素晴らしさを理解し、海外発信のもととなったこと。西洋の文化、流行を研究し、日本のキモノの良さを生かし、西洋に受け入れられるよう姿かたちをかえてものをつくったところ。海外に影響を与えるようなデザインのキモノをつくったところ（28人）／技術の高さ・日本の技術を駆使して海外よりもよい品質の絹物をつくった・絹織物の良さを伝えたこと（3人）／キモノを大切にしつつ、欧米文化と組み合わせ、絹文化を改革していったところ（3人）／海外の万博にも積極的に出品をしていたところ（2人）／ものづくりに対して真剣で、手を抜かないこと・ものづくりの精神（2人）／伝統を守るために少しずつキモノを進化させたところ（1人）／何事にもとにかくトライし、失敗を怒れることのないよう行動した点（1人）／発想力（1人）／自国文化を愛し、誇りをもっていったところ（1人）

3. 今後のキモノとのかかわり方

機会があればたくさん着たい（17人）／日常にも着られるキモノを着たい、日常的に親しみたい、普段のファッションとしてとりいれてみたい（13人）／成人式で着たい、正月など伝統的な行事、フォーマルな時には積極的に着たい（7人）／キモノに関する本当のことをいろいろな人に伝えたい、子供たちや知り合いにも着物の魅力（着方や歴史も）を伝えたい（3人）／着物を着て、文化として残していきたい（2人）／キモノのデザインをしたい（2人）／キモノについていろいろ考えてみたい、着物に関するニュースをチェックする（2人）／祖母の着物を見てみたい（1人）／着物を自分で購入して自分で着て外出できるようになりたい（1人）／甚平等はパジャマ代わりとして普段の生活の中で着物をもっと活用していきたい（1人）／着物のデザインや工夫をよく見てみたい（1人）／日本の文化であることを再認識したので、着物離れを止め、着物の良さを世界にアピールしていきたい（1人）

（注：回答者40名、複数記述）

この調査では、キモノについての価値観や認識を測るために事前と事後の調査項目は同じものとし、その結果を図2-(1)と図2-(2)に示した。また、最後の授業後には、それまでの学習内容についての興味や理解を図るアンケート調査を実施した。その結果は、表2と表3に示した。

なお事前調査は、授業実践を行う1年3組42名を



写真1 アメリカに現存していた鶏が刺繍されたキモノ風室内着

対象として2015年11月6日(金)に実施し、事後調査は、同年12月3日(金)に実施した。

図2-(1)と図2-(2)が示しているように、授業前後でキモノについての価値観や認識は大きく変化している。「強い肯定」5点、「肯定」4点、「中間」3点、「否定」2点、「強い否定」1点を与える5件法で、各項目について、対応する2群の平均値の差の検定(t検定)を行ったところ、1%の危険率で有意差が認められたのは、質問項目「2, 3, 4, 5, 6, 14, 15, 16, 17, 18」の10項目で、5%の危険率で有意差が認められたのは「7, 8, 13, 19, 20」の5項目であった。すなわち、事後には、「キモノの魅力の発見、文化的価値の承認、未来に継承すべきもの、美意識が表現されている、布を無駄にしない考えがある、欧米に日本的な美の様式を伝えた、ゆとりが西洋のドレスの構造を変えた、ファストファッションに取り入れられている、刺繍キモノの日本の近代化への貢献と欧米への影響」についての理解が深まり、「絹のキモノの魅力、民族衣装としての絹のキモノを誇りに思う、きもの文化を未来に伝えていきたい」という気持ちが強くなったことが認められた。

表2には、事後に実施した「学習内容への興味と理解」についての調査結果を示した。19の全質問項目についての数値が顕著に示しているように、「伝統衣装である着物の低迷している今日の現状」と「明治期の西欧を魅了した輸出用キモノ」の対比から、キモノの力を見出させようとしたこの授業は、高い効果をあげたことが確認された。特に、項目9の「20世紀初頭の欧米において、コルセット付きの窮屈な衣装がゆとりのある衣装に変化した際に、キモノの影響があったことが理解できたか」については、ほぼ全員の生徒(97.5%)が肯定していた。これは明治期に欧米で巻き起こったジャポニズムとファッションの関係を明らかにした映像資料「ファッションデザインのジャポニズム」を視聴し、さらに図録「モードのジャポニズム」を読んで考察したことから理解が深まったと考えられる。また、項目10の「明治時代に輸出されたキモノの実物の観察によって、日本の絹や刺繍の技の素晴らしさを理解できたか」については100%の生徒が肯定している。これは、アメリカから入手した輸出用キモノの実物を数点用意し、生徒に手で触れさせながら観察させたことが影響していると思われる。写真1は、円山

四条派が得意とする写実的な日本画を下絵として、精緻な刺繍がなされた羽二重のキモノである。このような超絶技巧ともいえる刺繍キモノがアメリカに渡り、ジャポニズムを巻き起こしたことは、生徒にとってこれまでは未知のことであり、心揺さぶられる日本の文化力の発見と感じられたのであろう。

表3は、「学習を終えて」という題目で生徒に自由記述させた結果である。キモノが欧米のファッションを転換させたこと、平面構成であること、絹地に日本刺繍が多くされてきたこと、日本の明治期の輸出用キモノが西欧を魅了したこと、ひいては椎野庄兵衛たちのものづくりの精神を理解し始めたことが示されている。日本の伝統衣装が直面している問題点に気づいた生徒も多く、着物を継承し発展させるためには何をすればよいかについて、現状と歴史的理解を踏まえてグローバルな視点から考え始めたことが確認できる。

おわりに

本年度に開発した、「時空を超えてよみがえるキモノ文化の再発見と継承をねらいとした被服学習」は、浴衣の着付けによって日本の衣生活の伝統と文化を学ばせる、通常の家庭科の授業をはるかに超えたものである。その効果については、今回の実践研究が明らかにしているとおりである。この学習プログラムをより効果的なものにするためには、欧米から収集した輸出用キモノの実物から、どのような意味を読み取り、それを踏まえた上で授業においていかに活用するか、という服飾文化史と教育方法に深く関わる課題がある。この課題についての追求が今後必要とされる。

引用文献

- 1) 高橋美与子, 柴静子, 日浦美智代, 一ノ瀬孝恵, 木下瑞穂, 高田宏「欧米を魅了した明治のキモノの探求を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第43号, 2015, pp289-298.
- 2) 朝日新聞 GLOBE「着物に明日はあるか3月1日版」, 2015.